

1 古本節用集総論

I はじめに——古本節用集類の意義——

漢語（漢字表記された日本語）を主たる掲載内容とした、日本の辞書の歴史を通覧した場合、最も多様にして多数の辞書が作成され、互いに影響を与えながら発展変化して行ったのが、室町時代の特徴であり、辞書の系統を考察する資料の豊かさに（現存する資料はそのごく一部であるが）驚かされる。室町時代の辞書の中で、目立って発展を遂げたのは、意味分類体辞書たる和名集類、いろは分類体辞書たる色葉字類、節用集類の三つの大きなグループである。和名集類については拙編著『意味分類体辞書の総合的研究』、色葉字類については『いろは分類体辞書の総合的研究』で議論を纏め、諸本の性格や系統の問題について論じたところである。

残りの一グループを成す節用集は、所収語をいろは分類した上で、それぞれの内部を意味分類するという二重分類の形態を取り、その点に限って言えば、色葉字類抄に似る。節用集類は、室町時代中期に、公武双方の知識階級の日用辞書として誕生したもので、巻頭初出の語により、伊勢本・印度本・乾本（実質的には易林本節用集を指す）の三系統に大きく分類される。従来の一般的な認識としては、和名集の一種たる下学集（東麓破納と称する僧侶の序を持つ。文安元年（一四四四）に成立）を継承して成立したもので、その最終形態たる易林本（慶長二年（一五九七）に刊行）が、江戸時代の節用集につながっていく、と考えられていた。しかし、この見方には、多くの問題点があり、一、節用集が必ずしも下学集を中心に資料として編纂されたものではないこと、二、伊勢本→印度本→乾本という直線的な継承関係は成り立たないことについては、以下に説明したい。いずれにせよ、下学集と易林本節用集の間に、多種多様な

節用集諸本が位置付けられることは事実であり、室町後期から江戸初期にかけての、纏まった日本語研究資料として重要である。この時期の節用集を古本節用集と呼んで、江戸時代以降に盛行し、辞書の代名詞ともなった節用集群とは区別する。古本節用集は写本で伝えられたものが多いが、饅頭屋本・天正十八年本・易林本は版行された。

さて、古本節用集の日本語学的研究は、橋本進吉の『古本節用集の研究』が、伊勢本・印度本・乾本の基礎的な分類を提唱したことに始まる。しかし、一方では、そこで紹介された諸本の一部が災害で失われ、一方では、その後多くの古本節用集が発見・紹介されているという現状に鑑みると、古本節用集諸本全体についての研究の再構築が必要であり、一から新たに調査考証を進め、新知見を体系化し、節用集研究の成果を積み重ねて行く必要が有る。

とはいえ、伊勢本・印度本・乾本という分類自体は、古本節用集の系統研究の基礎となる概念であり、その三大分類に沿って、現在解明されている諸問題の、要点を纏めることとする。引用する諸論文は、断り書きの無い限り、全て本書に収録されているものである。

Ⅱ 伊勢本系節用集の諸問題

〔伊勢本の諸本〕

伊勢本系節用集に属する主要な諸本で、調査が可能なものは、以下の一八本である。その分類は、橋本進吉『古本節用集の研究』で行われたものが知られているが、消失した文献も有り、新出の文献も有るので、ここに新しい分類を行う。分類と排列についての多くの部分は、先行研究を参照した結果である。()内の略称を用いる場合も有る。

1 天文十九年本類 (1類)